

ほうじょうげんあんおぼえがき

北条幻庵覚書

ほうじょう・げんあん

作者:北条幻庵(1493?-1589?)

成立:永禄5年(1562)



解題

Keyword

- 吉良氏朝
- 北条氏康
- 長綱
- 宗哲
- 北条氏綱
- 「東国紀行」

小田原北条氏の武将で文化人でもあった北条幻庵が、息女の吉良家嫁入りに際して与えた心得書き。戦国期の武家生活を伝える史料的价值をもつ。



(複製本)『幻庵おぼえ書』
自筆原本の複製(巻頭)

■ 成立と諸本

永禄5年(1562)武蔵国世

田谷の吉良氏当主氏朝(うじとも)に嫁いだのは、これまで北条氏康の娘とされてきたが、近年は幻庵自身の娘とする説もある。幻庵自筆の覚書は、吉良家に伝えられたものが明治期に千葉県長生郡の宮崎家に移り、明治18年(1885)当時の太政官修史館(東大史料編纂所の前身)の調査で発見された。以後、翻刻も出版され広く知られるところとなったが、原本は昭和44年(1969)宮崎家から小田原の郷土史家に寄贈され、複製本が作成された。現在、原本は世田谷区立郷土資料館に収蔵されている。

■ 作者

北条幻庵は早雲(伊勢宗瑞)の末子。幼名は菊寿丸。従来、史書の記述をもとに明応2年(1493)生まれ、天正17年(1589)97歳で死亡とされてきたが、近年いずれも疑問とする学説もある。ただ、長命を保ち北条五代すべてにかかわったことはまちがいない。幼時から箱根権現の僧になるように育てられ、大永4年(1524)近江国園城寺(三井寺)で出家した。天文初期(1530年代)には相模に帰国して箱根権現の別当(神宮寺の長)となり、法名は長綱

(ちょうこう)、後に幻庵宗哲(そうてつ)。この頃から北条氏の軍事行動にも武将として出陣、知行地の経営にも当たり、兄氏綱、甥氏康らを支えた。一方、幻庵は学問・文芸・風流に通じた文化人で、和歌・連歌・作庭に優れ、さらに尺八や鞍を作る工芸の才もあった。宗牧の『東国紀行』(#18)が幻庵の京文化との交流を物語る。小田原の久野に屋敷を構え、その系統は久野北条氏と呼ばれる。

■ 内容

12月16日付、漢字を少し交えた仮名書きの候文(そうろうぶん)24か条から成る。婚家・実家・夫等の呼び方に始まり、祝言と返礼の礼式作法、その後の年中行事のもち方などをこまごまと説く。幻庵の有職故実の知識と嫁ぐ娘への思いやりが感じられる。当時の東国武士の家庭生活や習俗を知る上で貴重な史料であり、また平易に綴られた文章は国語史研究の上でも重要とされている。



史料本文を読む

<複製本>

●『幻庵おぼえ書』1巻 立木望隆 1973 [K27.7/8]※自筆原本の複製 卷子本

<翻刻本>

◆「北条幻庵覚書」(『続々群書類従 第10』国書刊行会 1907 [081/3/10])

◆「北条幻庵覚書」(『日本教育文庫 女訓篇』日本図書センター 1977 [370.8/47/11]) ※同文館1910年刊の覆刻

◆「北条幻庵覚書」(『世田谷区史料』第2集 東京都世田谷区 1959 [K27.29/3/2])

◆「幻庵覚書」(『北条史料集』萩原龍男校注 人物往来社 1966 (第二期戦国史料叢書1) [K24.7/17])

◆「宗哲覚書」(『神奈川県史 資料編 古代・中世(3下)』神奈川県 1979 [K21/16/3-2])



史料についてさらに知る－参考文献－

◆「蒔田の吉良氏 幻庵の覚書と其解説」(『横浜市史稿 政治編1』横浜市 1931 [K21.1/5/1])

◆立木望隆「幻庵おぼへ書」(『概説北条幻庵』立木望隆著 郷土文化研究会 1970 [K28.7/13])

◆黒田基樹「久野北条氏」(『北条早雲とその一族』黒田基樹著 新人物往来社 2007 [K28.7/118])